

ある、平凡な公園の貌だ。X氏は、ゆっくりと歩きはじめた。

2

今日も、6月の雨が降っている。

耳鳴りが頭の芯に触っている。不快だ。X氏は、昨日よりも自分の存在が低くなっていると思う。理由はわからない。そう思ってしまうと、もう、今日という1日のすべてが決定されてしまったみたいで気が重い。おそらく、どんなに、ラッキーなことが起っても、今朝の感覚は消えることがないだろう。うっとうしいが、それは事実だ。仕方がない。少し壊れかけているのだろう。夜は、草の宇宙とでも呼ぶべきあの現象が気になって、よく眠れなかった。まるで、自分が宇宙の果てから果てまで歩いている蟻のように思えた。蟻が噛みしめなくてはならない感覚がよくわかった。それは、決して、特殊なものではない。宇宙をひと呼吸してみれば、誰にだってわかるものだ。10年も働いてみれば、いや、1日をそのまま生きるだけでも充分に理解できる。平凡で、実に、簡単なものだ。

鏡の前で歯磨きをする。やはり、存在の位置が低い。もう、何度も味わった感覚だ。顔まで猿に似て見える。今朝も、鏡のなかの顔は、左と右が逆になっている。この感覚も不快だ。しかし、いくら苛立ち、腹をたててみても、鏡という装置が、左と右が逆に映るようには出来ているのだから、

仕方がない。わかっている。X氏は、その事実慣れることができないだけだ。自分の顔をそのまま視ることはできない。しかし、鏡を裏切れば、不快な感覚はなくなるはずだ。どうするのか？ 答えは簡単だ。鏡を視ないこと。

X氏は、自分の存在の位置が低いから、鏡のなかの顔まで猿に似て見えるのか、鏡という装置がそうさせるのか、うまく区別できない。

鏡も光が生んだ赤ん坊だ。白痴のような顔が鏡のなかにあることが辛い。毎日毎日その思いがX氏の脳裡を掠め、X氏を苦しめる。

水を飲んだ。パンを食べた。ネクタイも結んだ。出発だ。鏡から離れる。透明な硬い棒をのみこむと、X氏の顔も身体も、どこにもいるサラリーマンの顔と、姿勢になって、朝の習慣の中へ滑り込んでいった。もう、存在の位置が低かろうが、高かろうが、まったく関係ないという表情になって、雨傘をぐいと宙に突き出すと、昨日と同じ歩調で、歩きはじめた。

眼のなかでも、ものがつるつる滑った。

樹木も、石も、砂も、昨日に比べると、少しだけX氏から遠去かっているようだった。雨までが少し稀薄になっている。しかし、X氏は、それらのすべてを無視した。空地に近い公園のあたりまで来ても、絶対に、それを見るものか、完全に無視して、通りすぎてやろうと思った。

結局、誘惑には勝てなかった。X氏は、公園を振り返って視た。セイタカアワダチソウが揺れて